書評

中山康雄著
『時間論の構築』(勁草書房，2003年刊)

本書は，前半の「時間論の構図」と題する第一部で，アリストテレス，アウグスティヌス，フッサール，ハイデガー，マクタガートという，古典哲学，現象学，分析哲学などの哲学のいくつかのスタイルを代表する哲学者たちの時間論について検討し，後半の「時間論の構築」と題する第二部で，主観的，現象主義的に捉えられた時間から相対性理論や生物学で捉えられた客観的，科学的レベルでの時間へと横断していく形で時間論を構築する，という構成を取っている．これにより，非常に包括的な時間論となっていることが本書のひとつの特徴である．それぞれの解説的な部分は簡にして要を得た明快な叙述でまとめられており，哲学的時間論という特定分野の研究書であると同時に，時間というテーマを軸とした哲学概論や哲学入門などのテキストとしても利用できそうな良き概説書となっている．

もうひとつの特徴は，著者が採り上げた何人かの哲学者たちをはじめとする様々な立場からの時間論上の主張に対して，著者が自己の立場を明確に表明したうえでそれらを論評していることである．そのことは，たとえばハイデガーの時間論に対して，「しかし，ハイデガーにあっては，これらの正しい記述は，誤謬の海の中に散在しているのである．(71頁)」という，感嘆ものの（どのような「感嘆」であるかは人によるだろうが）総括が与えられていることなどにも現れている．「時間」という，ややもすると徒に神秘化されかねないテーマに対して，できるだけ明快に論じようとする著者の姿勢には好感が持てる．

しかし，本書を読んで評者が最後まで納得が行かなかった点がある．それは，旗幟鮮明を旨とする著者であるにもかかわらず，いわゆるA論者とB論者の対立という図式の中で，四次元主義者としての自己の立場が「必ずしもB論者であることを意味しない(132頁)」として，自己を中立的な立場に位置づけていることである．たしかに，トゥーリーやマコールのように，四次元主義的な立場に基づきながら時間的生成の実在性を主張するA論者の立場があり得るので，四次元主義の立場を取ることがただちにB論者であることを意味するわけではない．しかし評者が読んだ限りでは，世界の実在的・存在論的な項目として，空間的な対応概念を持たない意味での時間的生成という事象を認める姿勢は著者にはまったく見られない．著者においては，A系列的な時間とは，体験的な時間の代名詞であり，時制表現は，意味論的には空間的指標語とまったく同列に扱いうる文脈依存的な表現以外の何ものでもない．そのことは，「A記述」という表現によって，空間・時間関わりなく「観察主体の視点から描かれた記述(178頁)」全般を表していることに端的に現れている（これに対して，「A記述から文脈依存性を消し去って得られる記述」が「B記述」だとされる)．そして，このように，

A系列に体験的レベルでの意義しか認めないこと，そして時制表現を空間的指標語と同列視し，文脈依存性を排した存在論的レベルにおいては消去可能であると考えることは，いずれもB論者であることの典型的表徴である．もしも本書で示されている著者の立場がB論者の立場でないのならば，おそらくこの世にB論者は存在しない．

もちろん，著者もマクタガートの証明で記述されている時間的生成の側面をまったく無視しているわけではない．「[マクタガートは] 未来のできごとが現在になり過去へと去っていくという出来事のA変化が変化を生み出すと考えている．(78頁)」と捉えているし，著者の「インデックスつき時制述語」の公理系における「どんな出来事も，現在$_k$ならば，必ず（後に）過去$_m$になる」(m>k) という公理図式（94頁）や「現在化順序の公理系」における「出来事eがkにおいて未来だということは，後のmにおいてeが現在になるということである」という公理図式（97頁）によって，それは表現されている．

しかし，マクタガートが行ったような形で，遠ざかる物体との類比によって時間的生成を形容することの不適切さは，夙にブロードによって指摘されているところである．それは，ブロードが「絶対的生成 (absolute becoming)」と呼ぶところの時間固有の変化を，物体の質的変化 (qualitative change) に不当に模してしまったことによる，悪しき比喩でしかない．少し長くなるが，現時点においてもA論者の立場を見事に要約していると考えられる彼の叙述を引用しておこう．

> 「質的変化と運動は，質的または実体的な持続を必要とし，またそれらはいずれも時間的生成を前提とする．」
> 「現在になる (become present)」ということは，実は，絶対的意味において，単に「なる (become)」ということである．すなわち，聖書風の言葉遣いでいえば「来たる (come to pass)」ということであり，もっとも単純には「起きる (happen)」ということなのである．「この水は熱くなった．」とか「この雑音が大きくなった．」のような文は質的変化を記述している．「このできごとは現在になった．」のような文は絶対的生成という事実を記述している．そして，質的変化が絶対的生成を含んでいることは明らかであり，また，質的変化を伴わない単なる持続にも絶対的生成が含まれていることも，私には同様に明らかだと思われる．したがって，絶対的生成があたかも質的変化の一つの事例であるかのように取り扱えると考えることは，まったく的外れなのである．」(いずれもC. D. Broad, *An Examination of McTaggart's Philosophy Vol. II* (1938), Part I 1.22より引用)．

この「絶対的生成」における絶対性は，「起きる」ことである以上免れ得ない，という意味での絶対性なので，相対性理論における同時概念の相対性とは何ら抵触しない．そしてこのブロードの主張は，時間的生成の実在性を主張する現在のA論者の根本的論点を的確に捉えている．これに対し，著者のように単に文脈依存性によって時制表現を分析してみても，その文脈依存性に由来する変化自体は，A論者が重要と考える

ところの時間的生成を捉えたことにはならない．重要なのは，著者の分析におけるメタ言語の中に登場する「過去になる」「現在になる」という表現が，果たして時間に固有な実在的変化としての「生成」の理解を抜きにして理解できるだろうか，ということである．A論者による「A系列なしには変化はない」という主張の趣旨は，A系列の変化によって示されるような「生成」が実在しないとしたら，真の意味での「変化」が実在するとはいえず，したがって「変化」というその本質によって「空間」と区別されるような意味での「時間」も実在しない，ということなのである（著者が83頁で紹介している，「火かき棒」の例えによるマクタガートのラッセル批判の趣旨もこれである）．これを真っ向から否定するのが，「変化」とは同一の四次元的対象の異なる時間的部分における性質の相違にすぎないと考え，その意味で，同一対象の異なる空間的部分における性質の相違と完全に同等視できると主張する，B論者的四次元主義であり，実際，著者は自己の四次元メレオロジーに基づいてその立場を主張していると思われる．とすれば，やはり著者はB論者以外の何者でもない．しかし著者も一方では，たとえば「私たちは，時間の中にいて，過去は確定しているが未来はまだ成立していないという状態の中にいる．（179頁）」などとも述べている．「未来がまだ成立していない」という存在論的事項を，著者の描く四次元世界の中に整合的に組み込めるのだろうか．仮に組み込めるとしても，その場合のA系列は単なる文脈依存性にとどめておけるのだろうか．そうでなければ，著者が主張するところの四次元主義の中には，実は「時間的生成」という時間固有の変化がメタ言語のレベルにおいて密輸入されてしまっていることになるだろう．

以上の理由で，評者は著者によるA論者の性格付けが根本的に間違っていると考えるのだが，マクタガート自身が少なくとも彼の叙述の一部分において実際にそうした誤解を招くような表現を用いたことがその大きな要因であり，この点に関して著者を責めるには当たらないかもしれない．また，著者が構成した公理体系は，A系列に矛盾が含まれているというマクタガートの主張が誤りであったことを明快に示している点で評価に値する．しかし，マクタガートの証明の解釈という点に関しても，やはり重要な部分でB論者としての著者の立場が不当なバイアスをかけてしまっていると評者には思われる．そのことは，74～89頁の「マクタガートの時間論」と題された節において端的に表れている．著者はまず，マクタガートの論文（The Unreality of Time, *Mind 17* (1908), pp. 457-474）中の三つの文を根拠にして，マクタガートにおいてはA系列が「観察する主体に相対的に捉えられている」と解釈する．その後，ラッセルによる時制のトークン反射的規定を紹介し，「ラッセルは時制の存在は意識の存在に依存すると考える」と述べる．そのうえで両者を比較し，「時制の存在が意識の存在に依存すると考えることにおいて，実は，マクタガートとラッセルは一致している」「マクタガートの立場とラッセルの立場の相違は，見かけほど大きくはないように思われる」とまとめている．

しかし，著者が引用を行っている部分のマクタガートの趣旨は，そもそも「できごとがB系列だけでなくA系列をも形成するということが時間の実在性にとって本質的

かどうか（強調線は評者）」という問いを立て，それに対して肯定的に答えることにある．そのため，「A系列が単に主観的だと考える者もいる」と紹介したうえで，彼ははっきりと次のように述べている．「私はこの見解は保持しがたいと信じている．なぜならば，上で述べたように，私には次のように思われるからである：A系列は時間の本性にとって本質的である．そしてまた，A系列を実在的と見なす考え方にまつわるいかなる困難も，同様に，時間を実在的と見なす考え方にまつわる困難となる．」

つまり，彼の本意は，観察者へのA系列の相対性を強調するどころか，まったく逆に，A系列の主観性を主張するB論者に対して異を唱えることにある．そしてそうしたB論者の代表としてその次の部分で採り上げられるのがラッセルであり，「火かき棒」の比喩によるラッセル批判もそうした文脈においてである．したがって，マクタガートとラッセルは，A系列を時間の実在的特性として認めるか認めないかという点において根本的に対立している．ラッセルが意識へのA系列の依存性を主張し，それゆえに直ちにその実在性を否定したのに対し，マクタガートは，いやしくも時間が実在するとすればA系列が実在しなければならないと考えたからこそ，A系列の中に見出されてしまった（というよりむしろ，ヘーゲル主義者として「あえて見出した」）矛盾を根拠として，A系列（および時間）の実在性を最終段階において否定したのである．つまり両者は，結果的にA系列の実在性を否定するという点において一致しているとはいえ，それに至る過程で表れるA系列の評価に関しては対極に位置している．彼らの相違は「見かけほど小さくはない」のである．マクタガートは徹頭徹尾，形而上学者として議論を展開していたのであって，彼に「体験の時間」を記述しようなどという意図は微塵もなかったはずである．

さて，結果として批判的な書評となってしまったが，その内容を冷静に振り返ってみれば，書評としての批判というよりも，B論者である（としか評者には思えない）著者に対する，A論者としての評者からの哲学的批判という性格の方が強いようだ．このように，おそらく時間論上の様々な立場に立つ者たちを色々な意味で「熱くさせる」だけの明確な哲学的主張内容を持っているという点で，やはり本書は好著だと思う．

（加地大介）

鬼界彰夫
『ウィトゲンシュタインはこう考えた――哲学的思考の全軌跡1912-1951』
（講談社現代新書，2003年刊）

新書版で417頁に及ぶ本書は，「言語」と「生」という観点から，ヴィトゲンシュタイン全哲学の歩みを辿ろうとする意欲作である．鬼界氏（以下敬称略）はヴィトゲンシュタイン哲学を，哲学者が自己救済のため行わざるをえなかったパーソナルな「私

哲学」として捉え，そこに現代における哲学的生の可能性を見出そうとする．本書の特徴の一つは，文献学的考慮の重視である．この姿勢から著者は，ヴィトゲンシュタインの主要テキストの成立過程を要所要所で整理・解説する．また近年刊行された遺稿データベースを活用しつつ，これまで一般の目に触れることがなかった草稿にも言及する．本書の叙述は明瞭で，入門レベルの読者にも配慮がある．しかしその内容は，これまでの国内外のヴィトゲンシュタイン研究の成果を単にコンパクトにまとめたり，裏付けたりするものでなく，むしろかなり大胆な独自解釈を多々含んでいる（例えば第二部の「対象」の単純性についての解釈，第四部の「感覚日記」批判の分析，また第五部の「私」についての主張，等々）．それらの解釈が，果たして説得的であるか否かについては，関心に応じて読者にぜひ考えてもらいたい．私は以下では，本書の或る欠落一つに的を絞り，それについて論評しようと思う．

大局的見地から見て本書に関して気懸かりなのは，全体の構成の中で，『哲学探究』第二部の検討がほぼ全く欠落している点である．『探究』第二部軽視の傾向は従来の研究の典型であり，必ずしも本書だけの特徴ではない．だが本書はヴィトゲンシュタイン哲学の全軌跡の扱いを謳っており，また，遺稿研究の観点から著者は，数次の取捨選択・推敲を経て漸く出来た「最終タイプ草稿」は，1912-1951年の期間で，『論考』，『探究』第一部，『探究』第二部，それぞれの最終草稿三点のみだと報告している（21-2頁）．にもかかわらず，本書第二・三部は『論考』の，最長の第四部は『探究』第一部の，最終部は『確実性』の検討に当てられ，『探究』第二部については，制作過程の一通りの説明はあるものの（因みに343-4頁の『探究』第二部のソース表にはMS169が抜けている），内容の本格的検討は――ソース原稿の検討を含め――遂になされないままに終わる．

『探究』第二部欠落の理由はおそらく，第二部の目的は『探究』第一部の思考を「心理諸概念に具体的に適用すること（339頁）」だと，つまり第二部は第一部で提供された観点の，豊かな言語現象への具体的応用（に過ぎない）と，著者が捉えているからである．鬼界はクリプキに倣い，『探究』第一部を「「規則」に関する議論と「私的言語」に関する議論を二つの柱（195頁）」に持つと見なすが，これらの議論の中核には，「+2」を突然「1000，1004，1008，・・・」と続ける生徒に関する有名な考察がある．このような数列展開は当然誤りだが，それが何故誤りなのかを探り当てることが，言語使用の規範性に関する『探究』第一部の重要な議論なのだった．鬼界は（他の多くの解釈者同様），算術概念の規則に関する考察が，他の言語使用を理解する上での重要なモデルになっていると考えている．すなわち，数列に関する考察は数学の領域を超え，「言語の全領域の根底に通じている（286頁）」と．しかし私の考えでは，言語に対するこの認識は不十分であり，この認識の下で捉えられ発展した『探究』第一部の思考なるものの単なる具体的応用が，第二部期の思考なのではない．もし私の考えが正しいなら，本書は重要な意味で，ヴィトゲンシュタイン哲学の全軌跡の記録になり損ねている．それは彼の哲学の「言語」という主題だけでなく，連動して，「生」のテーマも掴み切れていないことになる．以下ではこれを説明する．

『探究』第二部の時期，ヴィトゲンシュタインの心の哲学における関心は一つには，様々な体験概念にあった．例えばアスペクト体験，意味体験といったものである．また関連して母音の色体験，曜日の太さ体験などの変わった体験も言及される．ヴィトゲンシュタインは、これらの体験概念間のつながりを指摘する覚書も、随所に残している．

これらの概念への関心は，『茶色本』で登場する或る想定に遡れる（e.g. BB pp. 138-9）．そこでは「教師」が「生徒」に，色の明暗の比較を教えようとする．生徒は色サンプルを用いて，「より明るい」「より暗い」の使用を訓練される．その結果，生徒はいろいろなもの——例えば本や動物——をその色の明暗に応じて整列できるようになる．ところがこの生徒は突然，母音a，e，i，o，uを「明るさ」の順に並べるのである．教師の驚きに対し，生徒は「でもeはoより明るくありませんか」と答える．そして教師は生徒の（一種共感覚的）反応に何かがあることを認める．さて、生徒は「明るい」「暗い」を，教えられた通りに使ったのだろうか．——明らかに，この生徒と，数列の例での奇妙な生徒（彼は『茶色本』でも登場する）には連関がある（BB pp. 141-3）．同時に，両者の違いも明らかである．つまり数列のケースでの生徒の反応（「でも1000 + 2 = 1004ではありませんか」）が端的な間違いであるのに対し，明暗のケースでの生徒の反応は，教師自身の関心の持ち方ゆえ，正誤のレベルで考察される性質を与えられていない．これらのうち一方のケースは『探究』第一部の，規則順守の岩盤の考察へつながり，他方は第二部期での別方向の考察につながる．この考察の分岐の事実だけをしても，第一部と第二部の関係が，具体的応用の関係でないことが窺われる．

『探究』第二部時期に考察に登る体験概念の幾つかに，簡単な説明を加えておく．

・アスペクト体験：ヤストローの図の中に，ウサギとアヒルを交互に見る体験，等々．
・意味体験：詩を読むとき，或る語がその意味に満ちていると感じる体験．あるいは同じ語を繰り返し念じるとき，その語が意味を失うかに感じる体験．等々．
・母音の色体験：例えば母音eは黄色だと感じる体験．
・曜日の太さ体験：例えば水曜日は火曜日より太いと感じる体験．
・非現実感の体験：外界が「現実」感を喪失する体験．

これらの体験概念に関するヴィトゲンシュタインの思考は，次のように辿ることが出来る．

①〈これらの体験において，なぜ語が或る仕方で使われるのか〉

『茶色本』で生徒が母音の明暗を口にしたとき，視覚的対象に用いられる「明るい」等の語を，なぜ彼がここで突然使ったかが問題にされている（BB p. 136）．アスペクト体験においては，私は光学的に同一視覚対象を見ているにも拘わらず，ある時点ではウサギ，次の時点ではアヒルが「見える」と言う．これについては，同じ対象を見ているのに，なぜ違うものが「見える」，と言うのか，これは「見る」の誤用でないか，が問われる（RPP2 § 370）．意味体験については，意味が使用だとするなら（PI

§ 43)，なぜ「語が“意味”に溢れる」等といった使い方をするのか（PI p. 215a)，さらに非現実感の体験について，ある感覚を表すために，なぜ本来感覚語でない「現実」「非現実」という語を使うのか（RPP1 § 125)，が問われる．

②〈「なぜ？」の問いの拒否〉

上記①の問いに，正当化，理由，原因を挙げて答えることを，ヴィトゲンシュタインは，結局拒否する（e.g. BB p. 136, LW1 § 65, RPP1 § 1038, PI p. 216c)．彼の態度は，そのような言語使用が事実あるなら，それを見据えよ，というものである．

③〈これらの体験における言語使用は，自然の強制である〉

ヴィトゲンシュタインは，これらの体験における語の使用を，強制，自然，心の傾き，によって説明する．アスペクト知覚について：「[“見る”という] 語について私が学んだことが，私にここでこの語を使うことを強要する（RPP2 § 370; cf. RPP1 § 1038)．」非現実感の体験について：「私は [“非現実的”という語] を特定の意味で使うことを学び，そしてこの語を，私は今度はこのように，自然に（spontan）使うのである（RPP1 § 125)．」意味体験について：「私は [“意味”という表現] を選んだのでなく，むしろそれは私に強要されたのである（PI p. 215a)．」曜日の色体験について：「私は絶対，[“水曜日は太い”と言う方] に傾く（neigen)．・・・説明がどうであれ，この傾きが確かにある（PI p. 216c)．」

④〈これらの語をこれらの体験で使うことが，体験の原初的表出である〉

意味体験についての考察で，（母音の色体験も交えて）述べられる所見は重要である：「なぜ自分の体験に対し，まさにこの語を使うのか？・・・痛みの原初的表出が痛みに属しているのと同じように，この表現は，この体験に属しているのだ（RPP2 § 574，強調追加)．」この所見は，意味体験における「意味」の使用だけでなく，アスペクト体験における「見る」の使用等々にも同様に当てはまるものだと考えられる．周知の通り，ヴィトゲンシュタインの考えでは，痛み概念の根幹には呻きや叫び等の痛みの原初的表出がある．痛みの言語ゲームは，この表出に支えられている．それに対応して，意味体験の根幹には「意味」という語を使った体験の原初的表出がある．ここで痛みと意味体験の違いは，意味体験の原初的表出は既に言語的であることである．ヴィトゲンシュタインが別の箇所で言う通り，原初的反応は言語的な場合もあるのである（cf. PI p. 218b)．それは一定の概念習得を背景にした，人間の第二の自然としての原初的反応だと言える．

ヴィトゲンシュタインは，時に戸惑いながらも（例えば「これらは夢，幻でないか」という疑念)，これら体験の考察にこだわり続けた（LW1 § 69, RPP1 § § 355, 358)．これらの体験表明で生じていることを，ヴィトゲンシュタインは，概念の成長（Auswucks）あるいは建増し（Anbau）と呼ぶ（RPP2 § § 245-6)．だが別の箇所で

彼は，これは概念の拡張、つまり単なる (nur) 拡張ではない，とも言う (LW1 § 69)．例えば「+2」の概念は，自然数だけでなく負数，有理数，実数をも対象に加えていくことで，拡張できよう (cf. PI § 67)．「単なる拡張」ということでこの種の拡張を考えるなら，『探究』第二部時期で考察される「拡張」(ヴィトゲンシュタインが言う「成長，建増し」) は，確かに単なる拡張ではない．それはもっと異質の——例えば表出や体験の概念が絡む——拡張だと言わざるを得ない．

このような拡張は，人間の生活の中で重要なのだろうか．例えばヴィトゲンシュタインが考察するアスペクト知覚には，聴覚的なものもある：「これらの小節を，導入として聴く (cf. LW1 § 632)」，「ブルックナーの曲は，断片の集まりにしか聴こえなかったが，今では有機的全体として聴こえる (cf. LW1 § 677)．」この種の言語使用は，音楽の解釈・批評に欠かせない．また意味体験なしには地口に笑えないかもしれない (LW1 § 711) どころか，語感の微妙な差異が重要な，詩という文芸ジャンルが危うくなろう．「外界が現実感を失う」という類の表現なしに，患者はどうやって症状を精神科医に訴えるのか．さらに我々が見てきた言語現象は，例えば「深い井戸」「深い悲しみ」「深い音」という表現で，「深い」に，何か意味のつながりを感じることとも関係があるだろう (同音異義語 vs 多義語) (cf. BB p. 137)．また我々が「心の内」といった——哲学者が敏感に反応しそうな——表現を使うとき，それはピアノの音階に「暗い」「明るい」という語を使うのと類比的なことをしているのかもしれない(cf. PO p. 347)．

『探究』第二部時期のヴィトゲンシュタインの心理学の哲学のテーマは，ここで触れたものだけに尽きるのではない．しかしともすれば無定形に見えるこの時期の思考から，以上のような一筋の流れを取り出すことが出来る．そこには『探究』第一部に見られない新しいアイデアがあるのであり，第二部は第一部の具体的適用と見なすことはミスリーディングである．これが，鬼界がヴィトゲンシュタイン哲学の「言語」と「生」のテーマを描ききれていないと感じた理由である．だがことによると、第二部期の検討の欠如は、紙幅の不足にも原因があったのかもしれない。いずれにせよ、問題に関する筆者の意見を尋ねたいと思うのは、評者一人ではあるまい。

注：ヴィトゲンシュタインの著作への言及方法は，以下の略号を用いた慣例に従った．

PO	*Philosophical Occasions*, Hackett.
BB	*The Blue and Brown Books*, Blackwell.
PI	*Philosophical Investigations*, Blackwell.
RPP1&2	*Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol. 1&2, Blackwell.
LW1	*Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol. 1, Blackwell.

(丸田　健)

村田純一著
『色彩の哲学』(2002年，岩波書店)

本書は，分析哲学系の議論に最もよく通じた現象学者の一人によって書かれた，色彩に関する哲学である．この言い方は，たんにおざなりな紹介のつもりではない．もし本書の議論が成功していれば，恐らく分析哲学系にありがちな「科学」への迎合的な偏りを脱しつつも，現象学系によく見られる「文献」への教条的な忠誠とも一線を画した〈哲学〉が，色彩という具体的事象の分析に示されているはずだ，という大方の（？）期待を表明したものである．この期待はどれほど満たされたのだろうか？
評者の見るところでは，かなりの程度満たされたと言っていいと思う．とはいえ，もちろん著者はこの隘路を慎重な足取りで進み，決してすぐに破綻するような粗雑な議論を展開しているわけではないのだが，何か表現しにくい不満が残るのはなぜなのだろうか．これはむしろ，哲学にいつも〈優雅さ〉より〈野蛮さ〉を求めてしまう評者の方に問題があるのかもしれない・・・

本書の目指すところは，色彩現象に関する「生態学的現象学」である．それが何かといえば，「現象学的観点を生態学的観点と結びつける試み」(本書，p. 263)だと説明されている．ところで，この現象学的観点とは，このテーマに即していえば，色彩についての常識的な理解を「科学の先入見」から救出し，色彩についてのわれわれの経験を「生活世界」の場においてあるがままに記述しようとする態度である．ここからして本書は，(第I部）色彩が本質的に空間的な存在であること（それゆえ色彩が世界の中に存在していること)，および（第II部）色彩が多くの科学の主題となるべき多様性・多次元性を備えた現象であること，を主張することになる．

さて，著者の言う「色彩の科学」の先入見とは何か．それは，客観的世界を物理的世界とした上で「客観的世界に色は存在しない」，「光線に色はない」，「色とは感覚である」と主張する，実は科学的というより哲学的／形而上学的前提のことである．これのどこが問題か，むしろわれわれの日常的な色彩経験をこれと整合的な仕方で説明することの方が哲学のまっとうな任務ではないか，と考えてしまうのは，物理主義／自然主義に毒された評者のような者の浅はかさというものかもしれない．というのも，少なくともおよそ15年ほど前からの著者の揺るぎなき立場からすると，「物は赤いから赤く見えるのだという常識に含まれた実在論的直観は，どのような反省によっても逆転されない実在の優位を示している」(「他者の実在――実在論擁護の試み」，藤田・丹治編『言語・科学・人間』1990，p. 208）からである．もちろん，かつての大森荘蔵が苦闘した知覚世界と物理世界の「重ね描き」の問題が，物理主義／自然主義の枠組みの中ですでに解決されたと言うことはできない．なお今日も，「物は赤いから赤く見えるのか，それとも赤く見えるから赤いの」か（同，p. 192）という問題は，うまく解けていないのだ．

例えば，客観的的世界に色がないとすると，色は色のない世界から突然に生み出されることになるが，それは「精神と物質の相互作用を認めるのと同程度か，あるいは

それ以上の不可思議な過程を認めること」なのであり，これが理解不能なのは，「そもそも色のない世界には色彩の位置はまったく存在しないはずだからである」(本書，p. 13)．また，色彩が感覚だとしても，感覚という経験が赤いわけではないとすれば，赤の感覚は赤という対象についての感覚以外ではないだろうが，その対象としての赤はどこに存在しているのだろうか．「網膜のなかだろうか．神経系のなかだろうか．あるいは，脳のなかだろうか」，しかし「明らかに赤色はそれが見える位置，つまりわたしの目の前に位置している赤鉛筆のある場所に位置しているというほかはない」(本書，p. 14)．

こうして著者は，現代科学の基本前提を無効化した地点で，色彩現象がもつ独特の空間性の諸相を解明していくのだが，それら，色彩の奥行きや，表面色と面色の違いや，照明の役割や，色彩の恒常性などについての著者の議論の詳細は，今後，色彩について論じようとする者にとっては決して無視することのできない貴重な情報の宝庫となっている．さて，色彩に関して門外漢の評者としては，それらの議論の詳細に立ち入ることはできないが，そこから得られた一つの違和感と一つの刺激だけは報告しておきたい．

違和感とは，率直にいって，科学的／哲学的偏見にむしばまれていない色彩現象の無垢の（？）記述を目指す議論が，なぜフッサールやメルロ＝ポンティのテーゼにそれほど密着して展開されねばならないのか，ということである．事実，著者は知覚に関するフッサールの射映概念から出発し(本書，p. 22)，それに適宜注釈を重ねながら，第I部の議論全体を締めくくるに当たって，これで「色彩は射映する」というフッサールのテーゼの解明は一応の到達点に達したと宣言している（本書，p. 123)．しかしそれでは，色彩現象に即した，フッサール以降の新たな記述というものの〈権利根拠〉はどうなるのだろう．それらはすべて，フッサールの哲学的洞察のなかにすでに含まれているというのだろうか．フッサールの分析は，それこそ色彩現象の本質をすでに〈射抜いて〉しまっていて，いかなる色彩現象の記述もその分析に背くことはできないというのだろうか．少し言いがかりめいているかもしれないが，本書のスタンスが科学に含まれた哲学的／形而上学的な予断を廃するということであるなら，あまりに安易にもう一つの哲学，現象学の有効さを強調するのは，本書の具体的な分析の普遍性をかえって損なうようなスタイルではなかろうか．本書の至る所で行われている現象学的見方の「宣伝」もまた，現象学シンパ以外の読者にはかえって逆効果になっているように思われる．

この評者の違和感を逆の視点から述べれば，色彩現象を歪曲させる「哲学的偏見」に対する著者の診断は，基本的には昔ながらの現象学の教科書通りのものであって，感覚やクオリアの存在論的な問題を正面から受け止めようとはしていない，ということである．著者は，色彩の科学の前提には，「実在と仮象，あるいは，物理的性質と感覚といった明確な二元論的な概念図式」(本書，p. 6）があり，また「近代物理学で描かれる世界のあり方のみが真の実在であり，色を伴って知覚的に現れる世界のあり方は実在ではない[錯覚だ]」（強調は原著者，本書，p. 12）という形而上学的テーゼがあ

る，と主張するが，この種の捌き方は，現在の存在論的議論の微妙な論点には粗すぎるのではないだろうか．例えば，グローバルな物理主義／自然主義の企ての下で，たとえ色彩が〈錯覚〉だとされても，その〈錯覚〉の実在性が否定されるわけではなく，ただその〈錯覚〉の整合的な物理主義的／自然主義的解明が次の課題となるだけである．色彩の〈法則的な錯覚性〉は色彩に関する自律的な個別科学を十分可能にするだろうし，それゆえ〈錯覚〉という存在論的な分類をしただけでその扱い方が不都合だ，ということにはならないだろう．この点では，著者自身も大ざっぱな整理だと断っているが，終章における「消去説」「物理主義」「ディスポジショナリズム」の評価は，いささかおざなりという感がぬぐえない．いずれの陣営の論者も，これからという議論の展開をお定まりの二元論非難で門前払いされたと思うであろう．

第I部から得られた刺激を述べよう．それは，著者が繰り返し立ち帰る，〈空間性を初めから備えない感覚をいくら寄せ集めても空間的な感覚は生じない〉という論点である．ジェームズを引きながら著者が言うように，これは，「心の非空間性というデカルト以来のドグマ・・・を打ち破り，「心の空間性」，あるいは，「意識の空間性」を認める可能性を開く」（本書，p. 64）ものであろう．確かに感覚には，時間性は認められてきたものの，感覚〈経験〉という側面からか空間性は拒まれ，その違いが物質と意識の区別根拠の一つとさえされてきた．しかし，もし物理主義／自然主義が感覚とクオリアを本気で物理的世界に回収しようとするなら，たとえ性質一元論を取ろうと，あるいはスーパーヴィーニエンスに依拠する性質二元論を取ろうと，感覚／クオリアの本源的空間性を何らかの形で積極的に認める方向の議論が必要になるのではなかろうか．意識や感覚／クオリアの空間性の主張は，むしろ物理主義／自然主義にとってこそ，知覚世界と物理世界という厄介な重ね描き的状況を〈整合的な一枚の絵〉に収めるための突破口になるのではないか．しかし，これはもちろん，著者ではなく評者らにとっての課題である．

最後に簡単に第II部，ゲーテ，ウィトゲンシュタイン，カンディンスキーらの色彩論を素材にした色彩の多次元性の議論に触れておきたい．ここでもおおよそ魅力的と言ってよい仕方で論述は進んでいくが，読み進めていくにつれてどうしても無粋な問いをしてみたくなる．いったい，この話は科学か，文学か，それとも哲学か，そのいずれを目指したものなんだろう．そのどれでもないし，そのどれかであることはどうでもよい，というのが著者の答えだろうか．まあ，それもいいのかもしれない．出来合いの「ひきだし」に収めなければ安心できないというのは，野暮というものだろう．しかし，そのどれでもない，あるいはどれでもあるということが，どれとしても中途半端だということを隠すことになっていては，著者としても不本意だろうと思われる．例えば，ゲーテは，色彩の最も基本的な対立を〈黄〉と〈青〉に見て，その一方の極を「プラス　黄　作用　光　明　強　暖　近　反発　酸との親和性」（本書，p. 155）と表現する．あるいはまた，カンディンスキーは，その〈黄〉に関して「黄色は典型的に地上の色である．・・・黄色は，狂気を色彩で表現するものといった印象を与えるが，ただし，憂鬱症や心気症のそれではなく，むしろ凶暴性や盲目的な錯乱症，躁

狂症を表現したもの」(本書, p. 218) だと述べる. もし著者の狙うものがそれぞれの人間によって〈生きられた色彩〉の記述であるなら, われわれが求めるのはゲーテやカンディンスキーのそうした記述に対する著者の醒めた「解説」ではなく, 自分によって個人的に〈生きられた色彩〉を表現する現象学者・村田純一の (純一色の?) はじけた言葉である. しかし, その言葉は本書ではまだ聞くことができない. 著者の才能に対する期待の裏返しのつもりで注文をつけているのだが, その言葉が熟するまでは, 評者には, 色彩の多次元性の話は個別科学としてはあまりに真偽から遠く, 文芸批評としてはいささか退屈で, 哲学としては議論に欠ける, という思いを追い払うことができない. 著者のやろうとしていることは, 本当に生態学的現象学という哲学 (もしくは個別科学?) なのだろうか? これまた評者の独断と偏見の産物かもしれないが, 環境との相互作用を売り物にした昨今はやりの「生態学的〜」の行き着く先は, かつて〈意味〉や〈身体〉に難問のすべてを押しつけたのと同様に〈環境〉をすべてのゴミ箱にした, 口当たりがいいだけの哲学とは違うのだろうか? どなたか評者の蒙をひらいて頂ければ幸いである.

(柴田正良)

・・

野本和幸著
『フレーゲ入門——生涯と哲学の形成——』
(勁草書房, 2003年刊)

フレーゲは言うまでもなく, 現代論理学, 現代の論理哲学, 数理哲学, 言語哲学に多大な影響を与えた巨人の一人である. この領域での他の巨人としては, ラッセルやヴィトゲンシュタインなどの名が挙げられよう. ラッセルやヴィトゲンシュタインの業績については比較的早くから知られ, またその伝記的研究もそれなりになされてきた. とりわけ, 近年のヴィトゲンシュタインに関する伝記的研究には, 素人目にも目を見張るものがある. しかしながらこれに対して, フレーゲの業績についての本格的研究は, これらの人々の場合に比べると, ごく最近になってようやく盛んになってきたにすぎない.「フレーゲ革命」という言葉も, フレーゲ研究の専門家の間ではともかく, 評者のような専門家でない者にとっては, 比較的最近になって目につくようになってきたところである. (もっとも, それは単に評者がすでに時代に取り残されつつあるという証拠なのかもしれないが.) ましてや, フレーゲその人の伝記的研究に至っては, これまで日本語で読めるものは皆無に近かったと言っても過言ではない. 本書の登場はその意味で画期的な意義をもっている.

それゆえ, 本書はタイトルこそ「入門」となっているが, フレーゲを専門としない現代哲学の研究者が読んで十分すぎるほどに読み応えがある. 事実, 評者のなかでこれまで断片的に理解されていただけのフレーゲの見解, あるいはフレーゲに負うとさ

れる見解，フレーゲ解釈，かならずしも一筋縄ではまとめきれないフレーゲの諸思想，などを評者は全体的に俯瞰することができ，改めて教えられるところが少なくなかった．また，自分の見解のどこまでが忠実にフレーゲの（より正確には，○○時期のフレーゲの）ものであるのか，どこからがフレーゲを○○流に解釈したものなのかなど，自分の中にあった断片的見解をフレーゲの思想を手がかりとして整理することもできたように思う．

しかし他方では，一般の読者が，いわゆる論理学史，言語哲学，あるいは数理哲学の入門書であろうと思って本書を手にするならば，相当に困惑するに違いない．「直観主義」，「構成主義」，「道具主義」，「論理主義」，「分析性」，「デデキント＝ペアノの公理体系」，「ラッセルのパラドクス」，「内包論理」，「可能世界意味論」などについては言うまでもなく，標準的な論理学の教科書程度の知識ももっていないと，本書を読み通すのは辛いかもしれない．その意味では『フレーゲ入門』というタイトルはミスリーディングであろう．本書は確かに入門書ではあるが，今後我が国においてフレーゲの伝記的研究を手がけるのならば，まずは本書を出発点にすべきである，という意味において，入門書なのである．

著者は我が国におけるフレーゲ研究の第一人者であり，伝記的記述においてもその仕事は手堅い．本書の構成は次の通りである．第1章，現代哲学へのインパクト——フレーゲの再発見，第2章，フレーゲの業績概略——その哲学史的・論理学史的位置づけ，第3章，フレーゲ小伝，第4章，故郷・家族・少年時代，第5章，修業時代——イエーナとゲッティンゲン，第6章，イエーナ大学私講師時代，第7章，論理学の革命，第8章，フレーゲの数学・論理学講義（1879-1884），第9章，『算術の基礎』——論理主義のプログラム提示，第10章，学問的頂点——『算術の基本法則』（1893）公刊，第11章，論理と言語の哲学，第12章，フレーゲの危機，第13章，形式主義論争，第14章，同僚の評価と往復書簡，第15章，フレーゲの講義風景——学生たちの回想，第16章，晩年のフレーゲ，第17章，フレーゲと政治・宗教，第18章，現代哲学への影響と論争点いくつか．4，5章ではフレーゲの故郷や子供の頃から学生時代にかけての時代的背景が述べられている．7，8，9，10，11章が本書の中心と言えるであろう．フレーゲの中心的見解が手際よく，歴史的にまとめられている．もっとも，あまりに手際よすぎるので，初学者には理解しきれないところもあろうかと思う．第17章は，フレーゲの政治的，宗教的立場がどのようなものであったのかを述べた章で，興味深い．第18章では，フレーゲの思想が現代哲学の中でどのような形で受け継がれているかが簡単に示されており，参考になる．

16あるコラムは，フレーゲの講義題目を知る上での貴重な資料提供の場であるとともに，著者の海外での研究活動の一端を覗き見させてくれる場でもあり，いい息抜きの頁となっている．

入門と銘打ってあるが，現代の論理哲学，数理哲学，言語哲学などを少しかじったことのある人や，その分野の専門家に是非読んでいただきたい本である．もちろん，初学者にとってもためになる本ではあるが，そうした読者には，フレーゲの哲学の中味

に触れる部分は手強いので，そのようなところは軽く流して，伝記的な部分だけを楽しむ，という読み方を勧めたい．評者自身，数学者や物理学者の伝記を読むのが好きであるが，専門的すぎて理解できないところは流して読んでいる．それでも，結構楽しめるものである．

（服部裕幸）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

河野哲也著
『エコロジカルな心の哲学——ギブソンの実在論から』
（勁草書房，2003年）

認知科学の世界では，現在，「第三世代の認知科学」と呼ぶべき新たな動きが生まれている．たとえば，認知に対する力学系的アプローチ，R・ブルックスらの移動ロボット（モボット）に関する研究，自己組織化やオートポイエシスなどのシステム理論などが，この第三世代の代表者である．第三世代の認知科学の特徴は，一言で言うならば，「表象」概念を中心概念として認知を理解してきた第一，第二世代の認知科学に対する不信感にある．第一，第二世代の認知科学とは，それぞれ，古典的計算主義とコネクショニズムのことを指す．両者は，認知に本質的な表象がどのような形式を持つか（すなわち，構文論的構造を持つかどうか）に関して異なる見解を示すが，認知を理解する際に表象概念を中心概念とするという点では共通している．それに対して，第三世代は，認知の理解にとって表象概念は一切不要であると考え，身体を持つ主体と環境の直接的相互作用に認知の本質があると主張する．本書で紹介されているJ・J・ギブソンの生態学的心理学もまた，しばしば，この第三世代の認知科学の代表者の一つに数えられる．生態学的心理学がどのような立場であるのかを詳細に論じる本書は，その意味で，認知科学の最先端に関心のある読者にとって格好の著作であると言えるだろう．

しかし，本書が持つもっとも顕著な特徴は，認知科学の最先端の紹介にあるわけではない．本書の力点は，むしろ，生態学的心理学の本質がどこにあるかを掘り下げ，その哲学的背景，すなわち「生態学的立場の哲学」を明らかにしようとする試みにある．生態学的心理学を紹介する良書は本書の他にいくつも見られる中で，その哲学的背景を掘り下げて考察する著作はほとんどない．本書の特筆すべき点はここにあると言えよう（認知科学の第三世代全体に関して言えば，その基本理念をハイデガーの「世界内存在」と結びつけるような著作がいくつか見られる）．

筆者は，その生態学的立場の哲学の原則として以下の五つを挙げ（10-11頁），本書全体を通して，その原則の内実を明らかにすることを試みている．すなわち，① 過程の存在論（世界は根本的には，時間的に推移するもろもろの事象，すなわち過程process からできており，時間や空間や実体はそこからの抽象にすぎない），② 動物と環境の

相互依存性（生態学的環境において，動物と環境はおたがいに規定しあう相互依存的な関係にある），③ 直接知覚論（知覚は，感覚データを介して構成される間接的なものではない．わたしたちは，生態学的環境における高次の対象や事象，および，それらの意味・価値，すなわちアフォーダンスを直接に知覚することができる），④ 環境内身体としての自己（人間の自己とは，神秘的な魂や超越的な認識作用ではなく，環境に立脚した身体的自己である），⑤ 行為者の循環的な自己形成と環境の歴史（行為者は，環境との循環的な因果関係によって自己を形成して成長してゆく．また，環境の方も，動物との循環的関係によって変遷し，ひとつの生態学的な歴史をもつようになる），の五つである（各原則の内容は原文を適宜要約したものである）．この中でも特に注目すべき原則は ① である．筆者によれば，この「過程の存在論」は，存在論的多元主義やプラグマティックな実在論，そして，すべての性質は傾向的性質であるとするディスポジショナリズムと深く結びつく（第三章）．「生態学的心理学」というと，とかく ② や ③ ばかりが強調されがちである（筆者自身も，もっとも基本的な原則は ② であると論じている）が，その背景にこのような形而上学（存在論）があるということを明らかにしようとする本書の試みは非常に興味深く，かつ説得力もある．

しかし，本書の議論が，その論敵とみなす第一，第二世代の認知科学およびその哲学的背景である「認知主義」「表象主義」への反論に向かう局面では，いささか疑問が生じる．その疑問とは，それらの論敵があまりに低く見積もられていないかという疑問である．

この疑問は本書全体を通じてつきまとう疑問であるが，それが特に顕著となるのが，第一章「ギブソンの直接知覚論」における間接知覚論批判である．そこで筆者は，表象主義（認知主義）を間接知覚論に結びつけて理解している．そして，筆者によれば，間接知覚論は，主観的な心的世界である知覚世界を脳の中の小人が観察するという二元論的図式を本質的に含んでいるがゆえに困難に直面する．それゆえ，表象主義は生態学的アプローチの直接知覚論によって乗り越えられなければならないということになる．

しかし，表象主義がどのような立場であるかを論じる際にはより慎重であるべきではないだろうか．筆者の言う「間接知覚論」は，外界の事物の内的な代理物である表象（ないし観念）を知覚することによって外界の事物を間接的に知覚するという，いわゆる「代表象説」に他ならない．つまり，筆者は，表象主義を代表象説と同一視しているのである．しかし，本書で「表象主義（認知主義）」と呼ばれている立場とは，筆者も序論で記している（3頁）ように，第一義的には，第一，第二世代の認知科学の背景にある心の哲学のことであり，その哲学にとって本質的なのは，「表象」という概念を中心概念として認知を理解するということにすぎない．この「表象概念を中心概念として認知を理解する」というアプローチには，それ自体何かを表象するところの内的表象を内的な主体が知覚する状態として知覚や思考といった認知状態を理解する代表象説だけではなく，それとは異なり，単に何かを表象する状態としてそれらの認知状態自体を理解するという選択肢もある（第一，第二世代の多くは，この後者の非

代表象説的な表象主義をとっていると考えられる)．それゆえ，代表象説である間接知覚論を反駁することによっては，表象主義一般を反駁することはできないはずである．もちろん，第一，第二世代の認知科学の中には，代表象説的な表象主義を背景とする研究もあるだろう．しかし，表象主義を代表象説と同一視した上で批判したとしても，それは，生態学的心理学と第一，第二世代の認知科学の違いを不透明にするだけだろう（表象主義と代表象説の混同は，本書のみならず，第三世代の認知科学に基づく表象主義批判に一般的に見られる傾向であるように思われる)．

とは言え，本書を全体として見れば，生態学的心理学およびその背景にある生態学的立場の哲学を描き出すことによって，第一，第二世代に代わるパラダイムを提示するという本書の積極的な論点そのものは，その妥当性を決して損なわれていないだろう．本書の第四章では，生態学的な観点から，志向性という心のはたらきを「行為」ないし「身体を持つ主体と生態学的環境の相互作用」という文脈でとらえ直す試みが示されている．筆者によれば，行為とは「環境にはたらきかけるだけのものではなく，環境におのれを同調させるものである」が，志向性とは，その「行為をしている人物がしめすところの心的現象の特徴」に他ならない（152頁)．それに対して，第一，第二世代の認知科学は，間接知覚論を含意しない立場も含めて一般的に，志向性や表象といった概念を理解する際にこのような環境との相互作用にほとんど着目してこなかった．それゆえ，この点では，生態学的アプローチと第一，第二世代の認知科学の違いが明確に表現されていると言えるだろう．第一，第二世代の認知科学を批判するには，それらが間接知覚論に結びついていると論じるのではなく，むしろ，それらが以上のような環境との相互作用を軽視しているという点を第一に強調する方がより有効だったのではないだろうか（あるいは，志向性概念と表象概念の密接な関係を考えるならば，志向性概念だけではなく，表象概念をも主体と環境の相互作用という観点からとらえ直した上で，表象概念をそのように理解していない第一，第二世代の認知科学を批判するという選択肢もあるかもしれない)．

さらに言えば，この「志向性のとらえ直し」は，第三世代の認知科学を構成する他のアプローチと比べてもより魅力的な論点であるように思われる．それは，それらの他のアプローチには，ときに認知システムと非認知システムの質的違いを否定する傾向があるのに対して，本書で示された生態学的アプローチでは，とらえ直された志向性概念に基づいて，あくまでも認知システムの独自性が保持されるように思われるからである．たとえば，力学系的アプローチによれば，認知システムは調速機のような力学的システムと何ら質的に異ならないということになってしまう．もちろん，このようなアプローチを支持する人々は，積極的に認知システムと非認知システムの質的違いを否定するのかもしれない．しかし，それは第一，第二世代の認知科学に対する過度の反動ではないだろうか．これに対して，本書で示された生態学的アプローチは，主体と（単なる物理的環境ではない）生態学的環境の相互作用という観点から志向性（および表象？）概念をとらえ直すことによって，第一，第二世代の認知科学が抱える問題点を解決しつつ，認知システムが持つ独自性を保持することができるだろう．こ

の点で，本書で示された生態学的アプローチは，第三世代の中でもより魅力的なアプローチであるように思われるのである．

もちろん,生態学的アプローチにはそれ固有の課題がたくさん残されているだろう．たとえば，言語的活動を含む高次の認知能力を生態学的アプローチで十分に分析，理解することができるのか．生態学的アプローチでは他者理解はどのようにとらえられるのか．これらの他にも課題はいくつも挙げられよう．筆者は，これらの課題に対しても，積極的に取り組もうとする姿勢を示している（18-19, 58頁）．筆者の今後の研究，著作活動にもさらなる期待を込めることができるだろう．

（金杉武司）